

福岡市志賀島出土の金印

舟山良一(福岡県大野城市大野城心のふるさと館運営課歴史事業専門員)

江戸時代後期の天明4年(1784)百姓甚兵衛が現在の福岡市志賀島で偶然発見したと伝えられる金印は、日本で最も有名な考古遺物と言っても過言ではない。しかし、この金印についてはすでに江戸時代から偽物という説があり、また読み方についても多様な意見が出されてきた。近年新たな偽造説がだされ、またそれに対して反論も発表されている。以下に、改めて金印発見当時の状況や金印自体の最新情報を確認し、併せて近年の偽造説と反論の紹介を行いたい。

参考文献は後述の註のとおりであるが、研究史は大谷光男氏の『研究史金印』(吉川弘文館 1974)と、後藤直氏の「漢委奴国王」金印研究論『論争・学説日本の考古学4 弥生時代』(雄山閣出版株式会社 1986)によるところが大きい。さらに、九州大学を中心にした金印遺跡調査団による『志賀島―「漢委奴国王」金印と志賀島の考古学的研究―』1975と福岡市教育委員会による『志賀島・玄海島一遺跡発掘事前総合調査報告書一』1995は金印を総合的に考える際に極めて有効である。これらによって研究の経緯を振り返り、近年の研究状況への紹介へ進める。

◇発見当時の経緯と江戸時代の研究

金印の発見を伝える基本文書は甚兵衛の口述書である。同書は大正4年に黒田家の家史編集主任中島利一郎氏によって初めて全文が広く紹介された。包装紙に「志賀島村百姓甚兵衛金印掘出候付口上書」(以下「口上書」と略す)とある。やや長くなるが、基本文献なので、大谷光男氏の口語訳に基づいて(註1)、内容を以下に示す。

私の田は叶の崎と言う所にありますが、田の境にある溝の流れが悪くなったので、先月(天明4年2月：筆者註)23日に修理しようと岸を切り落としていたところ、小さな石が出てきて、さらに2人で抱えなければならないほどの石が出てきました。金てこで掘り除いたところ、石の間に光るものがあつたので、取り上げて水ですすいで見たところ、金の印判のようなものでありました。私などは見たこともないものだったので、兄の喜兵衛が以前奉公していた福岡の町家に喜兵衛が持って行って見せたところ、大切なものだと言われましたので、そのまままっています。ところが昨日15日(天明4年3月15日：筆者註)庄屋様より、すみやかにお役所に差し出すように申し付けられましたので、さっそくお届けします。なにとぞよろしくお願ひいたします。(日付は)天明4年3月16日、(差出人は)志賀嶋村百姓甚兵衛、(あて先は)津田源次郎様御役所。

さらに、続いて庄屋らの添書きがある。

右に甚兵衛が申しあげたとおり、少しも相違はありません。このような品物を掘り出したら、すみやかに申し出るべきであります。市中の風説が出回るまで差し出すことを申

し上げなかったことは遺憾で言い訳もできません。恐れ入りますが、なにぶんよろしくお願いたします。(日付は) 同年同日、(差出人は) 庄屋武蔵、組頭吉三、同勘藏、(あて先は) 津田源次郎様御役所。

以上であるが、口上書は甚兵衛本人が書いたものではなく、庄屋の武蔵が彼の言う所を代筆したものと考えられている。これによって、金印の発見が天明 4 年 (1874) 2 月 23 日、発見場所は志賀島叶の崎の田のそばの溝、金印は小石の下のやや大きめの石の下にあったということがわかる。発見から届け出まで 23 日間ほど間隔がある (註 2)。また、記述内容から、それほど深い場所ではないこと、金印以外に遺物らしいものはなかったのではないかということなどが推測できる。さらに、金印は構築物の中に置いてあったのか、散乱した石の間にあったのかという点については、金印に大きな傷が付いていないことから、大雨によって土砂とともに上流から流されてきたようなものではなく、何らかの構築物の中に置いてあったと考える立場の研究者がほとんどである。

さて、金印の鑑定に当たったのは亀井南冥である。亀井南冥 (1743~1814) は儒学者であり、また医者でもあったが、黒田藩の創始した東西二つの藩校のうち、西学甘棠館 (かんとくかん) の酒主となった人物である (註 3)。

南冥は金印発見年の天明 4 年に『金印鑑定書』・『金印弁』・『金印弁或問』を著し、これが『後漢書』倭伝に記載されている「建武中元二年 (西暦 57)、倭の奴国、奉貢朝賀。使人自ら大夫となす。倭国の極南界なり。光武、賜うに印綬を以てす」の印とした。

金印発見のニュースは比較的短時間で江戸や上方の知識人にも知られたようで、その読み方を中心にして多種の議論がなされた。論点は中国の印制との比較から文字の配列や「漢」の字が入る理由、「印」の字のない理由など多岐にわたっている。「委奴」の読み方については亀井南冥は「ヤマト」と読んだが、江戸時代には「イト」説が多かったようだ。

◇明治以後の金印本体の研究

明治以後、金印は邪馬台国問題とからめて多くの研究が行われたが、読み方については三宅米吉が明治 25 年に「かんのわのなのこくおう」と読み、現在もそれが定説になっている。

金印そのものに関する科学的な研究は昭和も後半以降になってから行われている。なお、金印の文字は通常の印の場合と違い陰刻である。これは紙に押すものではなく、文書類の入れ物の封の役目をする封泥に押すためである。

まず、金印の正確な測定は昭和 41 年 (1966) 5 月と 6 月に九州大学の岡崎敬氏を中心にして行われた。実際の測定に当たったのは、通産省工業技術院計量研究所の 3 人の職員である。計測値を示すと、総高 2.236 cm、鈕の高さ 1.312 cm、台高 (平均) 0.887 cm、印面はほぼ正方形であるが 1 辺の長さ (平均) 2.347 cm、質量 108.729 g、比重 17.94 であった (註 4)。岡崎氏は、中国出土の後漢建初 (紀元 81 年) の銅尺が 1 尺 23.5 cm であることから、金印の 1 辺はちょうど 1 寸に当たり、後漢代に作られたのは間違いないとした。これ以後、金印は真印としての評価がほぼ固まった。

また、金の含有率については、平成元年（1989）9月に九州国立博物館の本田光子氏らが蛍光X線分析を行い、金：銀：銅＝95.1：4.5：0.5であるという結論を得ている（註5）。きわめて高純度であることがわかる。

そのほか、平成20年（2008）3月にマイクロスコープによる表面観察が福岡市博物館で行われた（註6）。それによると、文字が鋳型に彫られていたものか、無垢材から彫り出されたものかは判断不能、鋳造技術はそれほど高いものではない、鈕孔内部は外見と違い上下に意外に広い空間をもつ（印台に鈕を貼り付けたものではない）ことなどがわかった。また、福岡市立博物館の大塚紀宣氏は、鈕は蛇の形を模したものであるが、一目で蛇とわかるものではない、本来は駱駝であったものを急いで蛇に変えたものではないかとする。後漢の朝廷では、朝貢してきた国の位置を考慮して印の鈕の形を変えた。当初倭は駱駝鈕で良いと考えていたが、南方にあるなら蛇だということで急遽変更したから通常の蛇とは違う形になったのではとする注目すべき説を提出した（註7）。

◇出土地並びに出土遺構の調査

ところで、金印出土地の特定や遺構の種類、そしてなぜ志賀島で見つかったのかという問題についてはさまざまな説があるが、決着を見ていないのが現状と言えよう。

出土地については、大きくは2説ある。現在金印記念碑が立つ場所と、そこから400mほど北西方向に位置する叶の浜と言われる場所である。前者は中山平次郎氏が唱えた説で、大正2年当時出土地について伝聞していた老夫の証言によるもので、古地図と状況が合う。ただし、現状は海蝕のため、水田部分は削り取られ、出土地点は消失してしまっているかもしれない。後者の説は森貞次郎氏の説で、金印記念碑の場所は水田が造ることのできるような地形でなく、叶の浜と呼ばれる場所の方がふさわしいとするものである。ただ、その場所は地形的に古地図と合わない。

出土地やその性格については、主なものとして隠匿説、箱式石棺や支石墓などの墳墓説、埋納遺構説などが挙げられる。志賀島全体の遺構分布状況を見ると墳墓説は成り立たないように思われる。志賀島に埋められた理由はさらに不明である。

金印の出土地点や出土地の探求には考古学的探索が有効であるが、最初の調査は大正2年（1913）に当時の福岡日日新聞社主催で行われている。この調査には九州大学の中山平次郎氏の参加を得ているが、出土地は前述した老夫の指摘だったとのことである（註8）。調査では形態不明の須恵器片が発見されたただけだった。しかし、この地には、大正11年（1922）に「漢委奴国王金印発光乃処」記念碑が建立され、現在に至る。

その後、昭和7年（1932）には福岡県郷土教育研究会が、同じく31年（1956）には九州大学医学部解剖学教室が箱式石棺墓を調査し、男女の人骨と200個近いガラス玉を調査している。昭和33年（1958）と34年（1959）には、森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気氏らが、個人宅の井戸掘り中に細形銅剣鋳型が出土したことを伝え聞いて、島の北部の勝馬地区で調査を行っている。須恵器・土師器・弥生土器・石剣片が出土した。

昭和48年（1973）には、福岡市経済局が記念碑の後背地に金印公園を造ることを計画し、九州大学考古学研究室を主体とする金印遺跡調査団が発掘調査を行った。奈良時代以

降の土器片などが出土したが、金印に関連する遺構・遺物は発見されなかった（註9）。

その後、平成元年（1989）に福岡市教育委員会が金印記念碑前の道路でトレンチ調査を行い、その際に水田面を検出したが、決して古い時期のものではなく、14世紀以前はラグーン状態で構築物を造ることができるような状況ではないことが判明した。さらに、平成5年（1993）、同6年（1994）、福岡市教育委員会が小規模な試掘調査や踏査を実施している。

福岡市教育委員会は、平成6年（1994）4月から10月まで、福岡市の島嶼部でリゾート開発等の事業が予想されるため、志賀島で文化財関係の事前の調査を実施した。その結果、金印出土地とされる叶の崎（金印記念碑の立つ場所）と叶の浜ともに、弥生時代の遺構はなく、かつ構築物を造ることができるような状態ではなかった。報告者は、文献の記述と考古学的データは全く合致しない、島の北部の勝馬地区には積石塚の石棺があり、同地区にそれと同様な遺構があったのではないかと想定している（註8と同じ）。

◇問題点

以上、発見の経緯や研究状況を述べたが、解決できない問題点が多々あることがわかる。文書類でも「口上書」は発見者名を甚兵衛としているが、秀治とする別の文書がある。これに対しては、甚兵衛が名前を変えたとか、甚兵衛は秀治を使って耕作させていたのではないかなどと言われている。また、出土地点は現在の記念碑のある場所で良いのか、その場合でも出土遺構はどんなものであったか不明である。さらに、なぜ志賀島に埋められていたのかもわからない。読み方も「わのなのくに」が通説になっているが、「いとこく」ではないかとする異論もある。

◇近年の偽造説と反論

大谷光男氏の『研究史金印』によれば、金印偽造説は発見当初からあったようだが、記録として残るのは天保7年（1836）松浦道輔『漢委奴国王金印偽作弁』である。昭和20年代には文部技官や山梨県立図書館司書などから偽作説がでた。しかし、昭和40年代になって前述の岡崎敬氏らの精密測定結果が公表されて以降は大きな偽作説は出なかったが、近年古代史の専門家と古代技術の専門家から新たな金印偽造説が出された。前者は三浦祐之氏の『金印偽造事件』（2006）（註10）で、後者は鈴木勉氏の『「漢委奴国王」金印・誕生時空論』（2010）（註11）である。真贋論争については、平成24年（2012）12月15日明治大学で開かれた公開研究会「「漢委奴国王」金印研究の現在」（註12）と、平成30年（2018）1月21日に福岡市で開催されたシンポジウム「「漢委奴国王」金印を語る～真贋論争公開討論～」（註13）の資料が刊行されている。また、朝日新聞の平成29年（2017）10月22日の朝刊文化の扉欄に中村俊介氏によってわかりやすく解説されていて便利である。

三浦氏は古代文学と伝承文学の研究者で、古事記に関する著書も多い。氏の主張は多岐にわたり、他の人の説も取り入れているが、おおまかに要約すれば以下のような点ではないだろうか。

- ・金印は石の下から見つかったにとしては、大きな傷もなくきれいすぎること。
- ・発見者甚兵衛の兄喜兵衛、持ち込んだ商家の主人米屋才蔵、「口上書」のあて先人津田源次郎、鑑定した亀井南冥らは旧知の間柄であったこと。
- ・発見時は黒田藩の藩校の甘棠館と修猷館ができ、鑑定者の亀井南冥は前者の祭主であり、藩校発展のために業績を求められる時期であったこと。

これらのことから、金印は江戸時代に亀井南冥が大きく関わった偽印の可能性が高いとする。

鈴木氏は古代の金工技術に造詣の深い研究者である。氏は金印の文字の彫り方を問題にする。さらい彫りと線彫りである。確かな下書きがあってその輪郭にそって彫るため、下書き通りに彫ることができる技法がさらい彫りで、文字線の両側と底の三面を同時に彫るため下書きの文字線のとおり彫ることがほとんど不可能なのが線彫りである。志賀島出土金印はさらい彫り、金印と同一工房で作られた可能性が説かれる江蘇省出土の「廣陵王璽」は線彫りで生産システムが異なる。また、金印の文字の線画には端部に行くにつれて太くなる特徴があるが、中国で出土した印は線の太さに変化がない。太くなるのは日本の江戸時代の印章に見られる特徴である。このようなことから、氏は金印は後漢時代に作られたものではないとする。そして断定はしないが、江戸時代に作られたことを想定されているようだ。また氏は、出土品ではない「流通古文化財」は偽物が多いため取り扱いには注意するよう主張する。

これらの偽造説に対し、高倉洋彰氏や石川日出志氏、そして大塚紀宜氏らが反論する。高倉氏は考古学者で、蛇鈕印は前漢初期から晋代まで認められ、第1段階（前漢初期）、第2段階（前漢）、第3段階（後漢）、第4段階（魏・晋）と形が変遷する。志賀島出土金印の蛇鈕はその形態から第3段階に位置付けられ、後漢の製作として問題ないとする。そして、この変遷観は現在までの出土例を踏まえることによって組立てることができるもので、出土例が少なかった江戸時代にこのようなことを知ることはできなかった。また、偽作するなら、「委」の字を『後漢書』に従って「倭」と作るだろうとする（註14）。

石川氏も積極的に真印説を唱える考古学者で、蛇鈕は戦国時代の1例が最古であるが、前漢代から晋代に及ぶとする。知られている蛇鈕を分類すると、志賀島出土金印はII A 2類になり、駝鈕（駱駝鈕：筆者註）の再加工品で、後漢代でも早い段階の製作と判断するのが妥当であると述べる。その他、印面の文字細部の特徴、金属組成、尺度、鈕形、鈕孔すべて後漢初期の製品として間違いなく、かつ江戸時代に製作することは不可能であると断定している（註15）。

大塚氏は前述のとおり、鈕を駱駝鈕から蛇鈕に変更したことを江戸時代に知ることは不可能であったとする（註7と同じ）。

◇終わりに

以上、志賀島出土金印について発見の経緯から現在の真贋論争まで紹介した。改めて金印については、出土地、出土遺構を含めて不明な部分が多いことを再認識する。近年の真贋論争については興味深いのが、専門的な技術論は筆者の理解の及ばない点がある。

筆者はかねてから、鈕については、よほど近づいてじっくり見ないと蛇とわからない点が不思議であったが、高倉洋彰氏や石川日出志氏の鈕の変遷観から後漢初期頃の製作とすると自然なこと、大塚紀宣氏の駱駝鈕から蛇鈕に変えたとする説は筆者の疑問がもっともであったと思える。そして、贗作なら、鈕の形をもっと具象的にするだろうし、高倉氏が言うように「委」の字も「倭」とするだろうと考える。このようなことから、筆者は志賀島出土金印は真印であろうと考えている。

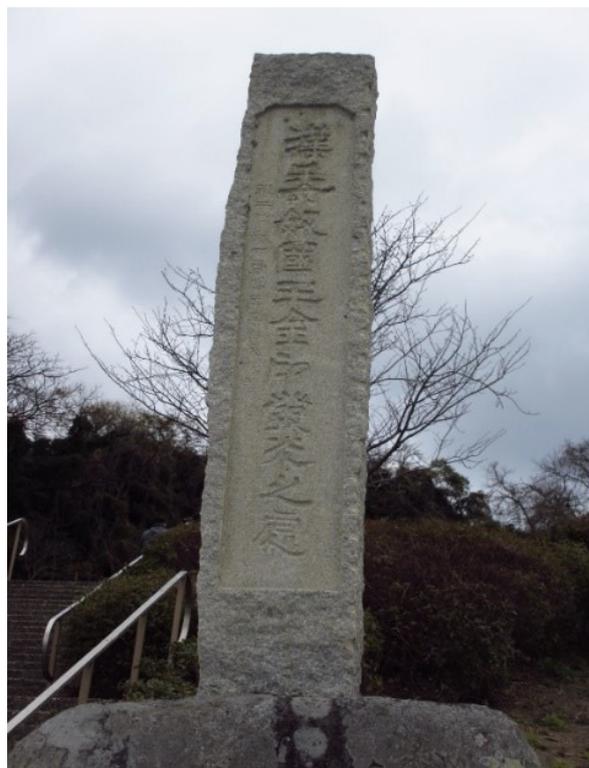
最後に、この小論を書くに当たって、お名前を出して紹介した各説について誤りなく伝えることができたか危惧する。そうでない場合はご容赦をお願いしたい。

また、資料収集の便宜を図っていただいた九州大学名誉教授の西谷正先生に感謝したい。

写真の説明 撮影日 2017年12月18日
撮影場所 福岡県志賀島 金印公園
撮影者 檜崎由美
説 明 執筆者



金印公園入口に建てられている記念碑



「漢委奴國王金印発光之處」と記載



金印公園に作られた「金印」のモニュメント



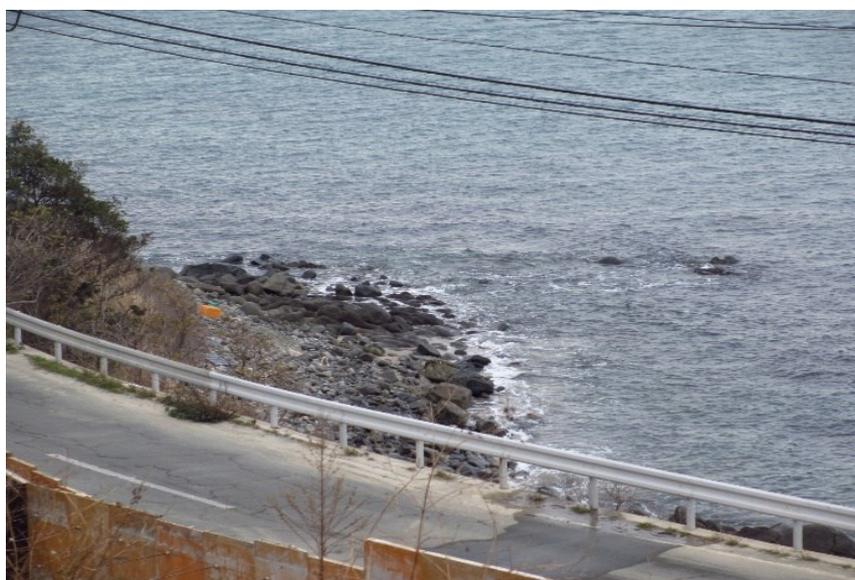
モニュメントの金印部分



金印公園に設置された福岡市博物館の説明板 金印が陰刻であり、「封泥」に押すためのものである事を示した図

金印公園前の海

金印出土推定地は海蝕のため、すでに失われた可能性がある。



- 註 1. 大谷光男『金印ものがたり』1979
- 註 2. 内田正男『日本暦日原典』(雄山閣出版 1975)によれば、天明 4 年(1784) 2 月は大の月で 30 日ある。
- 註 3. 東学は修猷館であるが、甘棠館は火事に会い再建されなかったため、修猷館のみが存続し、現在福岡県立修猷館高等学校として歴史を保っている。
- 註 4. 岡崎敬「漢委奴国王」金印の測定『史淵』100 号 1968
- 註 5. 本田光子・井上充・坂田浩「金印その他の蛍光 x 線分析」『福岡市立歴史資料館研究報告』第 14 集 1990
- 註 6. 大塚紀宣「マイクロスコープによる金印の表面観察とその検討」『福岡市博物館研究紀要』第 19 号 2009 参加者には金印偽造論を展開する鈴木勉氏も含まれている。
- 註 7. 大塚紀宣「中国古代印章に見られる駝鈕・馬鈕の形態について」『福岡市博物館研究紀要』第 18 号 2008 ただし、石川日出志氏によると、最初は加藤慈雨楼氏が気づいたとのこと。また、註 12 資料。
本田浩二郎「国宝金印「漢委奴国王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第 25 号 2016 も重要である。
- 註 8. 福岡市教育委員会『志賀島・玄海島一遺跡発掘事前総合調査報告書一』1995
- 註 9. 金印遺跡調査団『志賀島一「漢委奴国王」金印と志賀島の考古学的研究一』1975
- 註 10. 三浦祐之『金印偽造事件』幻冬舎新書 2006 と註 12・13 資料
- 註 11. 鈴木勉『「漢委奴国王」金印・誕生時空論』雄山閣出版 2010 と註 12・13 資料
- 註 12. 「公開研究会「漢委奴国王」金印研究の現在 記録」『古代学研究所紀要』第 23 号 明治大学日本古代学研究所 2015 には以下の報告が掲載されている。
石川日出志「金印と弥生時代研究－問題提起にかえて－」
鈴木勉「「漢委奴国王」金印誕生時空論」
高倉洋彰「型式学と漢の印制からみた金印」
大塚紀宣「金印の詳細観察と中国古代印章との比較－特に駝鈕印について－」
公開研究会〈「漢委奴国王」金印研究の現在〉：質疑応答
- 註 13. 『シンポジウム「漢委奴国王」金印を語る～真贋論争公開討論～』福岡市博物館 2018 以下の資料が掲載されている。
三浦祐之「天明四年のできごと 金印発見と亀井南冥」
鈴木勉「「漢委奴国王」金印誕生時空論ふたたび」
石川日出志「この金印は後漢初期にしか製作できない！」
討論は朝日新聞社の中村俊介氏のコーディネーターのもとに、上記 3 名に加えて福岡市博物館の又野誠、福岡市埋蔵文化財課の大塚紀宣、本田浩二郎氏らで行われた。
- 註 14. 高倉洋彰「漢の印制からみた「漢委奴国王」蛇鈕金印」『國華』1341 号 2007 と註 12 資料。さらに、高倉洋彰「講演会記録一『漢委奴国王』金印下賜の意味」『市史研究ふくおか』第 2 号 2007 福岡市博物館市史編纂室
- 註 15. 石川日出志「「漢委奴国王」金印と漢～魏晋代の東夷古印」『第 5 回高麗大学校・明治大学国際学術会議 文学と歴史を通してみた東アジア』2014 と註 12・註 13 資料
「高倉洋彰「漢委奴国王」金印と「親魏倭王」金印」『日本考古学』第 46 号 2018

※大野城心のふるさと館－大野城市の市民ミュージアムで平成 30 年 7 月 21 日開館